

第十八章 湖上都市へ

1

水辺で引きちぎったヨシを口にくわえながら、小田切ハジメは相変わらぬの仏頂面で、打ち寄せる波を見るともなく眺めていた。

まだ頭の奥底がくたびれたように重い。

足許の小石を拾って、座ったまま湖面に投げた。水鳥の一群がバツと飛び立った。

ふと、子供の泣き声が聞こえた。

ハジメは尻を払いながら、声のするほうに歩いていった。水鳥のいた辺りだ。

小さな頭が丈の高い草の間に見えた。四、五歳くらいの少女がひとり。岸辺の砂地に両足を投げ出して泣きじゃくっている。近づく少女はハジメに顔を向け、わずかのあいだ泣き止んだが、また激しく嗚咽し始めた。

ハジメは彼女の泣く理由が判った。

少女は裸足の足の裏からドクドクと赤い血を流している。すぐそばに真つ赤に染まったガラス瓶の欠片かけらが落ちていた。

水鳥の声に誘われるかして無心に駆けてきたのだろう。誤って踏んでしまったらしい。縦に割れた傷口が痛々しい。

見知らぬ男の接近に少女は身体を強張らせた。ハジメはそれを見無視して少女の足許にひざまずくと、血の滴る足をつかみ、無造作に持ち上げた。

生暖かい血液が手の平にかかる。

ハジメは構わずその手を傷口に当てた。

すると、少女の足の裏は徐々に熱を帯び始めた。ハジメはさらに手の平に力を込める。

脳裏には、京都工大の地下で見た光景が浮かんでいた。萌黄はこうやって頭を割った父親を介抱した。見よう見まねなのだ。

三十分もそうしていたらどうか。少女はすでに泣き止み、ぽかんと口を開けたまま、ハジメの顔と自分の足を交互に見つめている。

女の声がした。ひどく取り乱した調子で名前を呼んでいる。やがて姿を現した女はハジメに気づいて驚いた様子を見せたが、自分の娘が片足を彼の手にくだねているという奇妙な光景を見て、ヒツと声を上げた。

「わたしの娘に何を！」

母親はつんのめるように駆け寄ると、ひったくるように少女を抱き上げた。

足の裏は、すでにどこが傷口だったのか判らないくらいに完治していた。

娘を抱き上げた母親は、振り返りもせず一目散に来た道を駆け戻っていった。

娘の瞳は最後までハジメを捉えていた。そして視界から消える直前、その手をかすかに振ってよこした。

ハジメはまだ熱の残る手をズボンのポケットに入れると、つまらなそうに歩き出した。

湖岸を渡る風に、頬までかかる前髪が揺れる。

太陽は中点にあり、波は穏やかだ。

くわえたヨシを笛に見立てて、妙な音色を奏でなどしているうちに、ヨシ原の尽きたところに出た。

見捨てられた小屋がひとつ。その扉がギイと音を立てて開き、やっと帰ってきたという顔で萌黄が出迎えた。

「どこに行ってたん？ おじいさんがやつと目エ開けはったよ」

萌黄の頭越しに、齋藤が布団の中から「よお」と手を挙げた。清香を脇に侍らせて、彼女手づからお粥かゆを口許まで運ばせている。

「スケベジジイが」

ハジメは地面にツバを吐くと、また海岸へと歩いていった。

昨夜、彼らは柊がアジトにしていた喫茶店を出ると、

琵琶湖岸へと急ぎ逃げた。たまたまクルーザーが舳先を連ねているところに出たので、特に小型のものを選び、無断で拝借した。萌黄も清香も操縦などできるはずもない。リアルパワーで動かした。早い話が、後ろから「押した」のである。おかげで無用なエンジン音を発することもなく、誰にも気づかれずに湖へと出ることができた。クルーザーはひたすら直進し、琵琶湖タワーの対岸へと彼らを連れて行った。

とにかく柁の目の届かないところへ。

しかし柁は空を飛ぶことができる。追ってこられたらこちらもリアルパワーで応戦する他はない。しかし萌黄の身体は歩くのも億劫なほどだし、清香に大立ち回りは無理だ。

明るいう月に照らされた夜の琵琶湖は、奈良育ちの萌黄に、言葉にできない感動を与えた。だが今はそれどころではない。今度、柁に捕まったら麻酔くらいでは治まらないだろう。

（あの人にまで裏切られて……。もう誰も信用でけへんなあ）

今さらながら単独行動（清香もいつしよだった）に出たことを後悔した。考えてみれば、自分だってむんたちを裏切ったんじゃないのか――。

船を操るのは想像以上に難しく、水の上を左へ右へと

走ったあげく、砂浜の上にドツと乗り上げた。

そこは幸運にも人里離れたところだった。彼らは人知れずに上陸することができた。ふたりの男をリアルパワーで運搬する清香はすでに疲労の限界を超えていた。ようやくのことで空き家を見つけ、空中を滑らせてふたりを中に入れると、彼女も氣力が尽き、そのまま倒れてしまった。

それでも翌朝目覚めた清香は、十分に元気を取り戻していた。これもリアルパワーのなせる技か？

齋藤老人が意識を取り戻したのは昼過ぎだった。

「エセ坊主め、年寄りをおちよくりよって！」

老人は頬を膨らませて柊を罵倒した。隙をつかれて麻酔剤を打たれたため、柊の野望については、萌黄から聞かされてようやく知ったのだった。

「後遺症は残らなんやろな。生きてきてこれまで病院の世話になったことはないっちゅうのが、わしの自慢やさかいな」

萌黄たちは食糧を探しに行った先で、ここが近江八幡であることを知った。

すでに今朝早く、ギドラに頼んで、むんにメールを送信した。勝手な行動を謝罪し、柊の裏切りを伝え、堅田に行くことは危険であると伝えた。

返事はまだ来ない。

萌黄はハジメを追うようにして小屋を出た。

バーチャル世界が誕生して、今日で十日目。

（これから、どないしたらええんやろう）

昨夜、柊を訪ねてきたのは、正真正銘の真佐吉だったのだろうか。だとしたら自分たちが逃げ出して、柊はさぞかし困ったことだろう。

ハジメは見晴らしの良いところで木に寄りかかり、ヨシ笛の練習に余念がない。萌黄がそばにいても知らんぷりだ。

「ええ天気やね」

「……………」

「あそこに浮かんでるの、沖島おきしまっていうんやて」

「……………」

「右のほうに見えるの、何やろう。あんな岸边にビルが建ち並んだりして」

「フローシティー」

「えっ？」

どこかで耳にしたことがある。萌黄は記憶をまさぐった。

2

フロートシティー。湖に浮かぶ街。

二〇一〇年に計画され、数年前に着工された。

湖上都市とも称されるフロートシティーは、小さいながらもそれ自体が新たな街（都市）として設計された。オフィス街があり、住宅地があり、ショッピングモールがあり。中でも最大の売りはアミューズメントパークだ。周囲はぐるりと湖。ジェットコースターや絶叫マシンなどはかつてないスリルが味わえるとの前評判だった。

もつとも肝心な点は、フロートであること。

この都市は埋め立て地ではない。湖の上に完全に浮いているのだ。最新の技術により、湖面が波立っても地面は揺れない設計になっている。しかもこれは動力を備えているため、湖上を行きたい場所に移動することができる。萌黄が目撃した時、フロートシティーは近江舞子に「停泊」していた。

当初、滋賀県と某大手建設会社が提出した案では、都市は琵琶湖の中央に固定し、東の米原、西の高島あたりから橋を渡そうというものだった。県の発展を促すために湖の中央を横断するというのが、そもそもの発想の原点だった。

ところが各方面からこれに反撥が起きた。「美観を損ねる」「生態系が破壊される」という琵琶湖愛護派から、「ウチの市や町にも橋を渡せ」「いや他所よそに行け」などという利害の絡んだものまで。

議論は白熱し、やがて計画は徐々に姿を変えていった。そして最終的に現在のような形に落ち着いたので。

工事は順調に進んでいるかに見えたが、今春、建設会社の大掛かりな談合が問題となり、工事は中止のやむなきに至った。最大の注目を浴びていたアミューズメントパークなどはこの夏に先んじてオープンする予定だったため、当てにしていた人々をがっかりさせた。

現在、フロートシティーは誰も住む者のない街として湖に浮かんでいる。工事再開は未定のまま。

ハジメは湖上都市を「フロートシティー」と呼んだ。計画書に「フロートシティー（浮かぶ街）」と書かれていたのが「フロートシティー（流れる街）」と巷でもじって呼ばれるようになったこと自体、見通しのない現状を物語っている。

今やお荷物となりつつある湖上都市。

「漂流都市」「浮浪都市」などと揶揄される浮島。

萌黄が目にしたのは、遙か対岸に蜃気楼のように浮かぶ、哀れな都市の姿だった。

もつともこれらの知識は、後でギドラから聞かされたものだ。ハジメも詳しくは知らなかった。
ぐっつ。

ハジメの腹が大きく鳴った。

「行きましようよ」萌黄が小屋に足に向けた。「昨日か

ら何も食べてないんでしょ」

ハジメはヨシを指ではじくと、面倒くさそうに肩を揺らし、萌黄の後を歩いていった。

食事と言つても、菓子パンが数個あるだけだった。朝から清香と共に近所の家々をめぐり、ようやく雑貨屋の主人に分けてもらったのだ。

主人によれば、この辺りも人通りがほとんどなくなつたという。

「若い連中は食い物を探しに町へ出ていったきり帰つて来よらへん。残されたんは女子供やら、わしらのような年寄りばかりや。遊びたい盛り、食べたい盛りの子供が一番可哀想やな。親の目を盗んで家を抜け出しよるが、怪我をしては服だけ残して砂になつてしまひよる……。なんちゅう世の中になつてもうたんやろ。」

なあ娘さん。わしらはともかく、子供らに未来はあるんやろか」

見上げるような目で問われ、萌黄はごめんなさいと頭を下げてしまった。

電灯のつかない小屋の中で、小さな窓から差し込む陽射しを浴びながらメロンパンを食べていると、清香の携帯に着信音があつた。ギドラが帰還したのだ。

《メッセージの前に伝言を伝えるね。『ふたりとも、空を見た?』》

「空？」

「天気のことかしら？」

萌黄は窓枠に手をかけて、ガラスを透かし見た。

遙か高みにセスナ機らしき機影が五つ、横一列に並んで飛んでいる。

「あれは文字……かな？」

清香が言う。確かにセスナの吐き出す雲の点々が、文字を作っているようにもうかがえる。

ふたりは急いで小屋の外に出た。かなり元気を取り戻した齋藤老人もついてくる。

抜けるような青空には、次のようなメッセージが刻まれている。

『リアルタチヨ

W I B Aへキタレ

マサキチ』

「飛行機雲で文字を書いとる。わしゃあ、久しぶりに見たよ」

「スカイタイプングっていうんですよ」と清香。

「W・I・B・Aって？」萌黄が訊ねる。

《ウィーバ。湖上都市のニックネームさ》

ギドラはそこで、先に書いたような概要を萌黄らに解説した。

「そうか」萌黄は手を打った。「W I B Aは、B、I、W、Aの四文字を入れ替えたアナグラムなんやね」

《そうさ》

「湖上都市においでと、真佐吉さんは言ってるのね」
清香はつぶやくように言う。

《らしいね》

「真佐吉さんは、そこにいる？」

《かもね》

（かもね、か……）

萌黄の心中に疑念が湧いた。

いやもつと以前からもややと感じてはいたのだが。

（ギドラは、真佐吉さんと通じてるんやないやろか）

明白な根拠はない。

ただ、京都工大で野宮の三人の部下が電話一本で手玉に取られたことを思い出すと、疑いが濃くなるのをどうにも抑えられなかった。

ギドラは携帯から携帯へと自由に移動できる。さまざまなコンピュータにも容易に侵入できる。人間の行いをそれとなく観察することも可能だ。他人の弱みを知ることなど朝飯前ではないか。

——あるいは、真佐吉の手足となつて動いてるとか。

《そうだよ》

萌黄はドキツとした。しかしギドラは湖上を指さす清香の問いかけに答えたただけだった。

《ここからも見えるよね、ウィーバは》

萌黄はとりあえず疑念を胸の内にしまっておくことにした。まともに問い詰めても《さあね》くらいしか言わないだろう、この知能の高い怪獣は。

「行つてみるのかなさそうね」

清香は決意を表情ににじませた。萌黄も頷いた。

「他に道はないしな」

齋藤がうれしそうに言うのと、

「柊のヤツ、見つけたら叩きのめす」

後ろでハジメが指を鳴らした。

3

「あの湖上都市なら、転送装置を動かす電力も十分に供給できそうね」

夕刻。

さざなみ街道とも呼ばれる湖岸の道路が夕陽に美しく照り映える頃、萌黄、清香、齋藤、ハジメの四人は、ここまで乗ってきたクルーザーに再び乗船していた。

清香が、湖西の山陰に入ったウィーバを見つめながら言ったのは、コテージ村での相談を覚えていたのだろう。

「格好の隠れ家にもなりそうやしね」

ふと漏らした萌黄の言葉に、齋藤が噛みついた。

「隠れ家やと？ あないに堂々と浮かんどるやないか。

しかも空にデツカく『来たれ』なんて書きおってからに、敵にも見られるっちゅうねん」

「ホンマにね」

萌黄が緊張感の漂う声で応じると、齋藤は「ほう」と感心した声を上げた。

「お嬢ちゃん、あんたは真佐吉に会ったことがあったんやったな。どんな性格した奴っちゃ？」

「電話で話ただけですけど……彼は遊んでるんです」

「遊ぶ？」

「空に伝言を書くなんて度の過ぎたオフザケもそう。自分の替え玉を使ってわたしたちが元の世界に帰るのを邪魔したのもそう」

「ああ」

「彼は自分で言いました。これはゲームなんだって」

「それじゃ何かい、わしらはゲーム盤の駒か？」

齋藤は高らかに笑った。八十歳だけに笑いにも貫禄がある。

「奴さんがゲームの気分で来るっちゅうんやったら、こ

ちらも負けてられんな、なあ、ハジメ」

突然に名前を呼ばれても、ハジメはふてくされた顔で窓の外を見ているだけだった。萌黄は齋藤に加勢するつもりで、

「ずいぶんと愛想のないお孫さんですね」

「孫？ アツハツハツハ」

齋藤は腹を抱えて笑った。

「こいつはわしの孫やない。行きずりの、赤の他人や、ハツハツハツハ」

笑い声は萌黄の「ひどい」という非難の声までかき消した。

また夕暮れが訪れた。

船を砂の上から動かす役割は、ハジメが買って出た。清香は「力を加減してね」とアドバイスしたが、ハジメは片手を舳先に当てるようにして、すーっと、いとも簡単に船体を湖上に押し出した。

「かなり使い慣れてるわねえ」

船内から見ていた清香はうなった。萌黄も彼の技は何度も見せられている。ひよつとしたらこの世界で最高のリアルパワーの使い手かもしれない。

ハジメは砂地を蹴ると、身軽に甲板に飛び乗った。

湖上は深い藍色に染まっている。

対岸には、ところどころで道路の明かりがついており、オレンジ色が湖の上に帯のように伸びている。

クルーザーは向きを変えると、しずしずと幻想的な湖面に滑り出した。船を「押す」役もハジメが担当した。

もつともハジメは「船なんな乗らずに、ひとつ飛びに飛んでいけばいいじゃないか」と文句を言ったが。

今回もエンジンは使わないので、まるで手漕ぎボート並の、静かな航海である。

船体は長さ八メートル、幅二メートル半ほど。操縦席はむき出しで、ふたつしか座席はないが、中に降りるとそこそこの広さのキャビンがある。夜風がけっこう冷たかったので、操縦をハジメにまかせて、三人はキャビンへと降りた。

「まさかこのトシになって船遊びができるとは思わなんだ。両手に花やし、長生きはするもんや」齋藤老人はご満悦である。「これで酒でもあれば申し分ないんやが」

「冷蔵庫はカラでしたよ」

萌黄は先回りして言った。

外から見えないように、キャビンの中は暗くしてある。おかげで窓からは外の様子がよく見えた。

「むんさんたちと、わたしたちと、どっちが先に到着するかなあ」

清香が訊ねるともなくつぶやいたのは、出発する前に

湖西にいるむんたちとやりとりしたメールのことだった。むん、久保田、伊里江、五十嵐らのグループも、湖上都市ウィーバに向けて移動することを決めた。直線距離ならむんたちのグループのほうが倍くらいある。しかしむんたちには移動手段がなかったので、まずは車探しが必要だった。

夕方に来たメールでは、どうにかレンタカー会社を発見し、数台の電気自動車を「徴発した」と書かれてあった。

「まるで戦時中やな」と齋藤。

「本当の戦争はこれからかもしれませんよ」と萌黄。

「ハハハ。そら楽しみや」

琵琶湖は、楽器の琵琶を逆さにした形をしている。柁と遭遇した堅田では、左右の岸は非常に接近しているが、そこから北にかけて徐々に広がりを見せ、萌黄たちが横切ろうとしている辺りでは十二キロほどの距離があった。左舷の窓に黒々とした島が見える。沖島は湖岸からわずかに二キロのところに浮かぶ、琵琶湖最大にして唯一、人の住む島である。

その島影から一隻の船が音もなく動き出した。そして音もなく接近してくると、突然、サーチライトが灯され、強烈な光をクルーザーに浴びせかけた。

『ソコノフネ、トマリナサイ』

外国人のしゃべるような日本語だ。

「何よ、あれ！」

「米軍や！」

『トマリナサイ、イマスグニ』

言葉はたどたどしいが、有無を言わさぬ調子で停船を促している。

「くっそー、失礼なくらい眩しいのう。何も見えへんやないか」

「と、とにかく上に！」

その時、キャビンの入口からハジメの顔が逆さまに覗き込んだ。

「動くな。そこにいろ」

彼は言うど、入口の扉をパタンと閉じた。

4

エンジン音が徐々に間合いを詰めてくる。存外に音が軽い。

ハジメは操縦席の後ろに置いてある布袋をひっくり返した。手の平に収まる大きさの石くれがごろごろと床に転がり出た。こんなこともあるのかとあらかじめ用意しておいたのだ。

ハジメは手に取り、強烈な光を放つサーチライトのひ

とつ目がけ、渾身の力で投げつけた。距離にしてホームベースから二塁ほどの開きがあったものの、石は見事にライトに命中し、ひとつの明かりが消えた。

間を空けず、二投、三投とたたみかける。敵側がかわてて消灯に奔走したので、破壊されたのは最初の一基だけで済んだようだ。

暗い湖上に接近する船の姿が浮かび上がる。

予想した通り、船体はさして大きくはない。さらに目を凝らすと、軍艦とは似ても似つかない。ただの大型クルーザーである。

連中も「徴発」したのかとハジメは苦笑した。確かに上陸したのは陸軍だけだったしな。

だが船上に見える長身の人影はどれも肘を上げた姿勢をとっていた。銃を構えている。

ハジメは操縦席のライトを切った。

敵側の銃がうなりを上げた。しかし、その時にはもうハジメは空にいた。

彼はいち早く跳躍し、敵の大型クルーザーに降り立った。そばにいた兵士は、天から人が降ってきたと驚いたが、ハジメにとんと脇腹を突かれ、悲鳴を残して水面に落ちていった。

混乱が起こった。敵襲だ、ライトをつけると叫んでいるらしい。ハジメは再び宙に舞い上がった。そして身体

を丸くすると、自らが大きな石つぶてとなって船体に襲いかかった。

「ハジメめ、壇ノ浦の義経のつもりか」

齋藤が実況中継よろしく叫ぶと、感極まったように何度もシートを叩いた。

ハジメの跳躍を萌黄も清香もキャビンの舷窓からはつきりと見た。ちょうど雲間から月が現れた直後で、車輪のようにクルクルと回転するハジメの身体が月と重なり、ふたりの頭にウサギを連想させた。

それも束の間——ハジメは遙か宇宙の彼方から落下した隕石のように、米軍のクルーザーへと我が身を突き刺した。

炸裂音が辺りに響いた。続いて火柱が上がる。米兵たちが次々と水の中へと飛び込んでいく。

「うはあ、こりやまるで戦争やのう」

仰天する齋藤の言葉に萌黄は、

「そうですね。もう始まったんですね」

大型クルーザーはみるみる傾いていった。あたりの水面は炎に映し出され、船体の破片や溺れる米兵の頭部が波間に揺らいでいる。

船縁にハジメが姿を現した。服や髪はあちこちが焦げ、顔は煤にまみれていた。ウサギなら黒ウサギだ。

彼はなおも用心深く振り返っていたが、すでに戦闘能力を失った船は海面に没しつつある。

ハジメは戻ろうとしたのだろう、腰を屈めて跳躍の姿勢をとった、その時。

ダーン。

銃声が鳴った。

ハジメははじかれたように横倒しになり、船体の影に埋もれて見えなくなった。

「ああっ」

清香が悲鳴を上げる。萌黄はそれより早く、入口の蓋を開き、操縦席へと飛び出した。

冷たい風が髪の間を抜けていく。

炎、^{うごめ}蠢く外人、砕けた部品や木片。眼前に展開する光景は、ガラス越しに見ているのより遙かに生々しかった。狭い操縦席では助走もできない。萌黄は距離を目測すると、意を決して床をタンと蹴った。

ふわりと身体が浮き上がる。

（お尻の下から包み込むように空気を持ち上げんねん。

その量を調節すれば、望むだけの飛距離が出る）

『西遊記』で孫悟空が操る^{きんとうん}斛斗雲。彼女はそれを連想した。もちろん銃弾を防ぐべく、空気の鎧も身にまといつつ。

羽毛のような柔らかさで船縁に着地する。

「ハジメさん！」

彼の姿はすぐ見つかつた。片足を立てておき上がろうとしているが、もう一方の太ももから出血している。

「かすり傷だ。どうってことない」

ジーンスにじむ血もほとんど広がっていない。大した傷ではなさそうだ。

「バランスを崩したただけだ。くそっ」

ハジメは萌黄の出した手につかまり、起き上がった。

「飛べる？」

「問題ない」

ハジメは萌黄の手を振りほどこうとしたが、萌黄は離さなかつた。いっしょに飛べば安定感が増す。萌黄は目でそう言った。ハジメはそれ以上抵抗しなかつた。

すでに大型クルーザーは半ばまで沈んでいた。急ぐ必要がある。しかし謎の銃声は誰が撃つたのか判らないままだ。

「行くよ」

萌黄が言い、ハジメは無言で頷いた時。

ザザザツと波を蹴立てて、一艘の中型クルーザーが、沈む船と清香たちのクルーザーとの間に割って入った。

（他にも、おったんか！）

中型クルーザーがボンと奇妙な射出音を放った。

それが網であることに気づいた時には、ふたりともそ

の中に取り込まれていた。

予想外の攻撃に動揺するふたり。

（こんな綱くらい！）

萌黄は指をかけて出口を広げようと試みるが、引っ掛けた指がなぜか動かない。それどころか、動けば動くほど頭や腕や足に吸い付いてくる。

「静電気か？ チクショー」

ハジメも悔し気に声を荒げる。ふたりは真空パックされた状態で引きずられ、船縁を越えようと、冷たい湖水の中にドボンと落ちた。

5

（しもた！ 空気を道連れにすれば）

道連れではなく「たとえば」だったのだが、深く考えている余裕はなかった。身動きできないから泳ぐこともできない。ガボガボと息を吐きながら、いたずらに沈んでいくばかりだ。

背中合わせのハジメも歯噛みしているのは同じだった。いつもなら水の中だろうが火の中だろうが、思うままに操ってみせるのに、足に受けた負傷のせいかな、うまく気を集中させることができない。

彼らは知らなかったが、ふたりを捕えた綱は、米軍が

対リアル戦用兵器として開発した、静電気ネットだった。チリリとかすかな電流が網に流れており、リアルが能力を発揮するに必要な集中力を著しく削ぐ効果を出している。

すでに水中に落ちて二分が経過。

ふたりは呼吸困難に陥っていた。

運が尽きたかと思った瞬間、ぐいと網が引っ張られるのを感じた。

（今度はナニ？）

ぐんぐんと上昇していく。リアルたちが弱った頃を見計らって、生け捕りにしようという魂胆か……。

気を失うギリギリ直前、ふたりは水上に顔を出した。

「プハアッ」

ふたりは大きな口を開けて、縮んだ両肺に急いで酸素を送り込んだ。

「萌黄さーん」

清香の声だ。萌黄は目を動かして姿を求めた。

「萌黄さーん、生きてるー？」

心配げな声だが、生きてる？ という問いかたに萌黄はおかしくなった。

清香は萌黄と同じ目線にいた。クルーザーの操縦席から身を乗り出している。

（ということは……）

網の中で必死に頭を動かすと、自分たちを捕えた中型クルーザーは、ずっと頭上高く浮かんでいた。

「水中デートもなかなか乙なもんやろ」

齋藤が隣りでニヤついている。

萌黄は無性に腹が立ったが、彼の手の動きを見て愕然とした。

船を持ち上げたのは、齋藤老人だったのだ。

齋藤は、右手の人差し指を高々と上げたまま、左手を水平に走らせた。

アツと言う間もない。網を吊るしたロープは中途から切断され、ふたりは水の上に落ちた。

どうにか網を振りほどき、清香に引き上げてもらおうと、
「もうええか？」

齋藤はまるで、湯を注いだカップラーメンを前に、箸を持って待っているような面持ちで言うのと、

「ほな、さいなら」

と空に向かって告げ、人差し指をくいと動かした。

たちまち米兵たちを乗せた中型クルーザーは、目に見えない力で空高く持ち上げられた。そして突然神様が手を離れたように自由落下を始めたかと思うと、沖島の山腹に激突して大破した。

「ジジイ」濡れそぼったハジメが睨む。「お前、パワーが使えたのかよ？」

「わしかてリアルやさかいな。それにお前は知らんかったやろうが、お前と初めて会った寺で、わしは毎日巨石を浮かべたりなんぞして練習しとったんや。これも修行や言うて住職を騙くらかしてな。アッハッハッハ」

萌黄は暗い眼差しで、燃えるクルーザーを見つめていた。

米軍は意外に内陸深くまで迫っていた（すでに大津を中心に各所で展開している可能性がある）。

彼らはリアルに立ち向かうため、新たな武器を開発している（萌黄とハジメは、あの網が特殊なものであったことに気づいた）。

彼ら米軍も、空に書かれたメッセージを見たはずだ。となれば、リアルキラーズと共に、自分たちの行動を邪魔する存在になる。

「ざつと以上が、簡単な現状分析でしょうか」

清香がまとめた。戦いが終わってまだ十分と経っていない。萌黄もハジメも濡れた身体に肩からバスタオルを掛けて着席している。

「ゆっくりしてられへんね。いつまた敵に見つかるか」

萌黄が言うと、齋藤もウンウンと頷いた。

「やるならもっと芸術的な戦いをしたいもんやな」

萌黄は首をひねった。

とにかく全員一致で、船を捨てて、ここからは空を飛んで行こうということになった。そうと決まれば長居は無用。四人はキャビンから表に出た。

「ジジイ」ハジメが細い目をさらに細くする。「なんで俺におんぶされた。自分で飛べたんだろ？」

「アッハッハッハ」

齋藤はその特有の高笑いをしながら、ハジメの肩をポンポンと叩いた。

「お前に甘えてみたかったんや。初めて見たときからお前にはどことのう、そんな気にさせるナンかがあったしな」

「正気か、ジジイ。——俺は人殺しだぞ」

ハジメが声を落とすと、齋藤は意に介した様子もなく、「そんなもん、どうでもええわ」

と軽くあしらった。

四人は手をつないで輪になった。

リードするのは、飛び慣れたハジメである。

「行くぞ」

短く言うのと、全員が呼吸を合わせてクルーザーの床を蹴った。たちまち彼らは空に浮かんだ。

目指すはWIB^{ウィーバ}A。

さてこの日、むんたちはどんな行動をとっていたか？

6

野宮助教授は無人のレジにコインを置いた。その手がすぐにガムのパッケージを剥きにかかる。

コンビ二にはほとんど品物が残っていない。店員の姿もない。彼が割れた入口から覗いてみたところ、ガムの箱が落ちていたので誘われるように足を踏み入れたのだ。タダでもらっていくのは盗みを働くようで気が引ける。彼は律儀に代金を置いた。

銀行もカードも機能停止中だ。財布の中身も残り少ない。

（給料日は、まだ先だというのに）

ふとそう思ってから苦笑した。その日までこの世界があるのだろうか。

ガムを口に放り込むと、蜜柑の甘酸っぱい味が広がった。この味が消えるまでの短い時間、彼はイヤなことを忘れることができる……とも限らない。

「助教授」

「——なんだね」

ガムを噛むアゴの動きを止める。

「このリアル探知機、もう少し感度を上げることにはできませんか？」

野宮は白衣のポケットに両手を突っ込み、シュウと名乗る迷彩服に向かい合った。

「無理だ。大学でも話したとおり、百メートル圏内に入らないと検知しない。元来人間の発する電波は微弱なものだ。その点はリアルも同じなんだよ。まあ、あと数日経ってリアルのエネルギーが高まれば別だがね」

「それでは遅い」シュウはこの男の癖で短い言葉を早口でしゃべる。「大津というだけでも広すぎる。我々搜索する側の人数は少ない。とてもカバーしきれない」

「判った判った」助教授は議論はもう結構と言わんばかりに両手を挙げた。「せいぜい努力しよう。過度な期待は困るがね」

生返事である。野宮が背中を見せて立ち去ろうとする、と、

「あと、昨夜のようにあまりひとりで出歩かないでください。身の安全を保証できない」

「数ヶ月ぶりに大学の外へ出たんだ。散歩ぐらいさせてくれたまえ」

野宮は手をひらひらさせつつ、駅前の移動研究所に足を向けた。

J R 堅田駅。琵琶湖大橋とは目と鼻の先である。

野宮がトレーラーに必要な機材を詰め込んで、ここに到着したのは昨夜のことだった。

同時刻、リアル柊が橋のたもとで目撃され、迷彩服たちと交戦状態に陥った。柊は鬼神のように奮戦し、迷彩服側には多数の死傷者が出たという。

野宮は遅れて現地に踏み込み、性能を上げた改良型のリアル探知機を肩に下げて、迷彩服に命じられるままに調査をおこなった。しかしながら、リアルの反応は皆無だったと、野宮はシュウにそう報告した。

蜜柑の味を噛みしめながら、野宮はてくてくと歩く。

（おや？）

湖西線に沿って伸びる国道を左へ折れればJR駅前のロータリーである。移動研究所はそこに駐車してある。

今その曲がり角の近くで、一台の乗用車が迷彩服たちに取り囲まれて立ち往生していた。

「何なんですかア、あなたがたはア」

平凡な身なりの男が運転席でうろたえた声を上げている。迷彩服たちは単に任務として乗用車に止まるよう求めたに過ぎない。

「アンタ、戒厳令を聞いてないのか？　こんなところをどんな理由があつてのんびり走ってる」

「ドライブですよオ、戒厳令だったって法的拘束力はないとテレビで言っていましたよオ。それにあと数日で世界が

終わるなんて噂もあるしイ、ずっと家に閉じこもってたストレスもあるしイ、この際、住み慣れた琵琶湖を一周しようかなって思い立ったただけなんですウ」

「ひとりでか？ 家族はどうした」

「出たくないって言うもんですからア」

（なるほど、そんな気分にもなるものか。しかし世界の終わりが噂されているとはな）

などと野宮が尻を掻きながら眺めていると、また別の車が南からやってきた。これも迷彩服によって停止させられた。こちらは老夫婦だ。

「一生の記念にと思いましてな。琵琶湖を周遊するつもりです」

先の男と似たような理由である。ひよつとしたらネットなどを通じて、そんな気運が高まっているのかもしれない。

迷彩服たちは、割り当てられた仕事をこなすべく、カメラで運転手の顔を撮影し、リアル顔画像と照合した。変装程度なら一秒で見破る。もちろん身分証の確認もおこなう。

空をヘリコプターが横切っていった。迷彩服のひとりが耳を押さえながら話しているのは、そのヘリだろう。

「——車が？ 数えきれないほどの台数が国道を北上しているだ？」

むんは感心した。

信太がこれほどの策士だとは思ってもよらなかった。

集まった乗用車が一台また一台と駐車場から出て行く。信太がその一台一台にしゃちほこばって敬礼を送っている。その横には、悠然と笑みを浮かべながら五十嵐が鎮座していた。

「不思議な光景だねえ。時代錯誤じみてるというか」

久保田がアゴをかきながら言った。彼の脇には常に寄り添うように和久井助手がいる。久保田は時に迷惑そうな顔を見せたが、彼女は気がつかないのか能面のような顔を崩さない。

「おかげでわたしたちが動きやすくなるのは確かね」

むんは相づちを打ちながら言った。

空のメッセージを見て、萌黄からのメールを受け取り、自分たちも近江舞子へ移動しようとして決めてから、さして足をどうするかという問題が、むん、久保田、伊里江、五十嵐の間で議論された。そこへ七人乗りのワゴン車に乗って帰ってきたのは信太だった。

「駅前のレンタカー会社からー、借りてきましたー」

おおーと皆は手を叩いて喜んだ。議題は道中の心配へと移ったが、

「それもー、ワタクシの一存で手配してみましたー。こ

のコツテージ村近在の人々に集まってもらってますー」

信太の策によれば、彼らに車を出させ、四方に走ってもらおうというのだ。攪乱戦法かくらんである。

「コツテージ村最盛期にはー、彼らも地元民としてかなりウチからの恩恵をこうむったハズですー。頼めば請け負ってくれるでしょー」

ところが集会所に集まった面々は渋い顔をした。彼らは戒厳令や社会情勢の不穏なことを盾に、首を縦に振ろうとしない。

それはそうだ。いくら過去に世話になったとはいえ、あまりに危険過ぎる。みんな怪我を恐れて家から一步も出たくないのに、なんと琵琶湖を一周しろというのだから。

むんや久保田も精一杯、説得を試みた。ここで自分たちを助けてくれることが明るい未来を切り開くのだと。

しかしそれにもほとんど耳を貸す者はいなかった。

「よつく判りましたー」信太は膝を叩いて立ち上がった。

「たぶんあなたがたはー、空腹のあまり動けないのではないでしょーかー？」

むんは集まった百人ほどの住民の顔を見渡した。どれも頬がこけて青白い。食糧も既に底をつき、空きっ腹を抱えて、部屋の隅でじっとしている日々に違いない。

「しばしのお待ちをー」

信太は配下の若者を呼ぶと、鍵束を渡して耳打ちした。若者は頷いて集会所を出て行った。

やがて十分と経たないうちに、ぞろぞろと若者たちがやってきた。手に手に山のように食糧を携えている。米やパンをはじめ、野菜も数知れず。中でも住民が歓声を上げたのは、今や希少価値の冷凍肉だった。

「ワタクシのーコッテージ村にはー、地下貯蔵庫がありましてー、ここには多量の食糧が備蓄しておりますー。皆さんにお分けしたいと思いますのでー、どうぞお持ちくださいー」

住民たちの顔色が明らかに変わった。中には拍手をする者、涙を流す者もいた。

「その代わりに！」信太はピツと締まった声を出した。

「代わりと言っては何ですがー、皆さんのご協力をぜひとも仰ぎたい。これを食べて元気になったら、ワタクシたちを助けていただきたいのですー。たった一日、いえ半日で構いませんー。お礼はコレでー！」

信太は冷凍肉のパックを片手で突き上げた。全員の視線が彼の手に集中する。

「近江牛を食べたいかあーー!?」

「イエーッ!!」

こうして『車もたくさん走っていれば、リアルの一台中くらいは目立たない』作戦は実行に移された。

信太の策によって、数多くの車が町へ散っていった。

彼らはむんたちが目指す近江舞子方面ばかりでなく、南の浜大津や京都へも向かった。すべて信太の指示による。

「考えることがいちいち細やかだねえ」

久保田が感心した声を出すと、

「ワタクシの頭には、さまざまな戦略軍略が入っているのです」

と信太は誇らし気に答えた。軍事マニアという自称は、そういう意味だったらしい。

「我々もそろそろ出発するか」

久保田が膝を叩いた。すでに準備はできている。

七人乗りワゴンには、運転手に久保田、助手席にはナビ係のむん、ミドルシートには信太と五十嵐、リアシートに和久井と伊里江。

それぞれが乗り込んで、シートベルトを締めた。

むんはバックミラーでそれとなく後ろを観察する。

伊里江の調子は相変わらずで、目の下の隈が痛々しい。和久井は久保田から引き離され、何度目かの拗ねモードだ。能面の下表情もかなり読めるようになってきた。信太はネット上の地図でなく、紙の地図とにらめっこ

している。逆探知を恐れてネットに接続しないという「掟」を忠実に守っているのだ。

五十嵐は——ただただ窓の外を眺めていた。

五十嵐と信太のふたりは、比較的地味な配色のポロシャツ&スラックス姿に改めさせた。信太は不満そうだったが、軍服ではあまりにも目立ち過ぎる。

ついでに和久井助手も。白衣を脱がせると下は意外にもピンクのサマーセーターだったので、むんは意表を突かれた。これも恋のなせる技か？

出発したワゴンは、もちろん国道には出ず、多少悪路でも山際の道をたどっていくことになった。

「迷彩服たちの持つリアル探知機は、半径百メートルほどしか有効半径がないそうです。だからニアミスしない限り大丈夫でしょう」とむん。

左には（伊里江にすれば右）には比叡山。右を見おろせば琵琶湖。ワゴンはうねうねと続く道を走り始めた。

目指すは、近江舞子。

そこに浮かぶ、湖上都市WIBA。

「あのお坊さん、ヒイラギといったかな」

唐突に五十嵐が訊いた。

「はい」

むんが顔を後ろに向ける。

「彼はお坊さんでも何でもなかったというのは本当かな。しかも仲間を裏切ったとか」

萌黄がメールで教えてくれた衝撃の事実だ。

リアルキラーズの攻撃をいとも簡単に退け（詳細は書かれていなかった）、齋藤とハジメに麻酔剤を打ち、彼らを手土産に真佐吉と交渉しようと企んだという。

むんはハイと答えて、心中では別のことを考えていた。萌黄たちは間一髪で柵の魔の手を逃れることができた
と聞き、むんはホッと胸を撫で下ろしたが、

（わたしを残して出ていったのは、ヴァーチャルなんかでは役に立たないと思われたからやろか……やろな）
という思いが捨てきれない。

（当然やわね。そばにいてたら、わたしを庇^{かば}おうとしてかえって萌黄が窮地に立たせるかもしれへんし）

それでも自分は萌黄をサポートしようと誓った。きっとリアル世界にいるリアルな自分も「萌黄を助けてあげて」と必死で念じているに違いないから――。

「お、お待たせしましたー」

信太は起立するように立ち上がった。その結果イヤというほど天井に頭を打ちつけてしまった。

「――どうしました？」

何を待たせていたというのか、久保田たちがいぶかしんでいると、

「ツツツ……湖上都市に関する情報をまとめたのですー。ネット検索は無理なのでー、過去に受信したメールマガジンなどから編集しましたー」

信太は頭を押さえながら、湖上都市の来歴について述べ始めた。それは前述したとおり。

ここ三ヶ月は近江舞子のほとりに浮かんでいる。

陸地から渡る通路は付いているが、当然ながら関係者以外は立ち入り禁止。中にいるのは、メンテナンス会社から派遣された十数人ばかりの人間だけ。

「敷地はですねー、これはすごい！ 縦横一キロメートルありますー。五十メートル四方のパネルが四百枚合わさってできているとかー。建物類は地上だけでなく地下、つまり水中ですねー、そちらにもあるんだそうです」

湖に浮かぶパネル？ むんは蓮の葉に乗るカエルを想像した。

「聞いていると、子供の頃、映画で見た未来都市のようだな。これからそこへ向かうのかと思うと、ちよつとばかりワクワクしてきたよ」

久保田はのんきなことを言いながら、くねくねと曲がる山道を右へ左へとハンドルを切る。しかし、むんがその横顔を覗くと、言葉とは裏腹に緊張感が頬をヒクつかせていた。

「……未来都市が、大きな罠となって待ち構えている」

伊里江の苦し気な声が全員の耳を打った。「……皆さん、油断しないでください。奇策を好む兄のことです。何が待ち受けているか——。とにかく我々が真っ先に探すべきは転送装置です」

「そうやね」

むんが引いた顎に指を当てた。彼女は気づいていないが、たいていの男性が心をときめかせる仕草だ。

「となると、内部の詳しい情報が欲しいなあ」

「書店によりましょー。解説本かムック本が置いてあるかも——」

「いいえ。もつといい所があります」

信太の声を遮ったのは意外にも和久井助手だった。

全員が耳を疑った。まさかの人物の発言である。

「お嬢さん、それはどこかね？」

五十嵐が上体を反らして、後部座席に問いかけた。

「WIBA記念館があります。そこを訪ねれば湖上都市全体の立体地図が入手できます。デジタルデータも配布しているので、携帯電話にコピーすればいいでしょう」
むんは伊里江兄弟の秘密基地で見せられた立体地形図を思い出していた。確かにあれは役に立つ。

「へえー、そんな施設があったとはね。貴重な情報じゃないか。で、場所はどこなんです？」

和久井は久保田に訊ねられたのがさもうれしかったの

か、息をはずませて答えた。

「わたしの生まれ故郷なんです。最寄り駅は小野で、記念館は駅前にあります。堅田の一駅北です」

信太がすかさず地図を広げ、額に手を当てた。

「アチャー、湖岸のキワ、国道沿いですねー。こりゃーヤバイ！」

堅田で迷彩服がウヨウヨしているなら、小野にも――。

「行くしかあるまい。和久井さん、ありがとうよ！」

久保田はアクセルを強く踏んだ。

薄目を開いて何げなく隣りを見た伊里江は、奇妙な動物を見たように両目を丸くした。

和久井助手が顔を真っ赤にしてうつむいていた。頬に押しつけた両手のあいだからは、裂けたような口がへらへらと笑っていた。

ハッと伊里江の視線に感づいた彼女はあわてて顔をそらした。しかしあわて過ぎた。額をゴンと窓に打ちつけてしまったのだ。幸い、誰も気づかなかったが。

8

堅田、国道沿い。

シュウは臨時設営のテントの中にいた。琵琶湖の周辺から頻々と入る報告のとりまとめに忙殺されていたのだ。

一台の幌付きジープが猛スピードで近づいてきた。中から眉間を曇らせた男がシュウを呼んだ。

「真崎隊長代理！」シュウは急いで駆け寄り、敬礼した。「お身体の具合はよろしいのですか？」

「大きな声を出すな。頭に響く」

真崎は頭に巻いた包帯を乱暴に剥ぎ取ると、しかめた顔で路上に投げ捨てた。大学での爆破騒ぎの際、頭部を打撲した彼を救護室に運んだのはシュウだった。幸い、皮一枚が砂状化しただけで事なきを得たが。

真崎はシュウに乗れと指先で合図した。

ジープは北に向けて急発進した。

「状況を報告せよ」

「はっ」

シュウは脇にはさんでいたノートパソコンのキーを叩いた。画面に琵琶湖全体が浮かび上がる。

「W I B Aにはリアルキラーズ百名を投入し、監視に当たらせています。ただW I B A責任者が認めないため、主要な建物への入館ができず、現在は地上のみの配置となっています」

「バカやろう、許可などいるか！」

「しかしW I B A都市は異常といえるほど高度なセキュリティで守られているので、下手に突入することもできません。ましてやセキュリティシステムを破壊してしま

えば、リアルたちの侵入を察知することが困難になります。不慣れな都市での搜索は極力避けたいのです」

「ということは、真佐吉もリアルどもも、まだ内部に侵入してないんだな？」

「どのセンサーも警報は発していませんので」

「俺たちの訪問を受け入れるよう、総理から圧力をかけさせよう」

真崎は携帯電話でホットラインを呼び出そうとしたが、その手を停めて、

「他はどうなってる？」

「今朝から妙なことが流行しています。大津市を中心とした住民が、琵琶湖一周のドライブに続々と出かけているのです」

「聞いている。俺もここに来る途中で見た。危機感の乏しい日本人らしい話だ」

「原因はどうやらネット上の大手掲示板です。『これ以上、家にこもるのは耐えられない。もうすぐこの世が終わるという噂もある。細心の注意を払えばそうそう怪我などするもんじゃない。みんな表に出よう。安らかな心で運命の日を迎えるため、懐かしい風景に身を浸そうじゃないか』。そんな趣旨の投稿が目につきます」

「フン」

真崎は興味なさそうに喉を鳴らした。

「明らかにリアル搜索の邪魔です」

「どうしようもあるまい。放っておけ」

「いっそ、散らばっているリアルキラースをWIBAに集めてはどうでしょう」

「冗談を言うな。あんな飛行機雲のメッセージを鵜呑みに信用するのか？ 真佐吉の陽動作戦だったらどうするんだ」

「しかしリアルたちもWIBAに向かつてるでしょう」

「こちらの知り得ない連絡手段で、別の場所に連れて行かれたらどうする」

「電話、ネットはすべてコンピュータでチェックしています。京都工大以後、彼らのIDによるアクセスは一件もありません。もちろん別のIDへの乗り換えもできないよう、そちらも手配済みです」

真崎は不快そうに腕を組むと、

「あの光嶋の娘、それに真佐吉の弟。こいつらは大学にいる時、やたらコンピュータをいじっていたな。何か連絡を取り合うための小細工ソフトでも作ってたんじゃないだろうな」

「リアルたちが逃亡することは想定外でしたから、コンピュータルームでの行動はノーチェックでした」

ジープは夏が戻ってきたような陽光の中をひた走る。

この辺りでは湖岸が国道に迫っている。反対側にはJ

R線が並走している。ただ列車の走る姿はまったくない。

「あれは何駅だ？」

「小野です」

「駅向こうに、妙な建物が見えるな」

「あれがW I B A 記念館です。W I B A 建設に導入された最新技術の展示施設です。言い遅れましたが、あの記念館にはW I B A の立体地図データが公開されています。さきほどこれを引き出し、警備に当たる者たち全員に配布しました」

「ほう。気が利くな」

真崎はシュウを見やった。ふたりの付き合いは長い。

リアルクリアーズのメンバーの中で、彼が最も買っているのがこのシュウである。

「で、記念館のほうはどうした？」

「は？」

「まさかデータをそのまま残しておいたんじゃないだろうな？」

シュウの顔に緊張が走った。

背後から運転手の肩を叩いて停車を促すと、運転手と助手席にいた隊員に指令を与えた。

「これからすぐW I B A 記念館に向かえ。そして、W I B A に関する情報をすべて消してくるんだ！」

ふたりの隊員は降車し、すぐさま記念館へと向かった。

太陽の陽射しが団地の影をアスファルトの上にくつきりと落としている。その影から影へと縫うように駆けていく影が三つ。

「待ってくださいーっ」

影のひとつが音を上げた。信太である。

「しーっ。静かに」

戻ってきたむんが口の前で指を立てた。

信太は両足を投げ出して道路の上に座り込んだ。

「少しだけー、少しだけ休んだら行きますからー」

「もう、体力なし」

「だってー、私はリアルじゃありませんよー」

「わたしもよ」

「あ、そうでした」

人気の絶えた団地。^{ひとけ}琵琶湖から流れてくる風が各棟に当たってピューッと口笛のような音を発している。

「さあ立って」

むんが信太の腕を取った。

「もうですかー？ ワタクシの辞書には、全速デ駆ケルなんて言葉はないんですがー」

「元陸上部のわたしの辞書には、何ゴトモ全力デとしか

書かれてへんねん」

「そんな辞書、役に立ちませんよー」

「ええんよ。全力でやったら何ごともうまくいくから」
三番目の影が悠然とした足取りでむんの横に立った。

「信太、無理することはない。ここで待っておれ」

「そんなあゝ、閣下とも思えぬつれないお言葉」信太は路上で膝を折り敷くと、五十嵐に向かって頭を下げた。

「不肖この信太、閣下といっしょにどこまでも突き進む所存ですー。我々の究極の目的である――」

「判りました、判りました」

むんが長広舌になりそうな信太の口を封じた。

すると五十嵐は腰のサーベルを握り、くるりと背を向けるや、信太の前に膝を屈めた。負ぶされというのだ。

「そんな、そんな、恐れ多い！」

信太は恐縮のあまり、後ろへと下がり、つまづいて花壇の中に尻から倒れた。

「もーっ！」むんが爆発した。「いいかげんにして！全然前に進まへんやん」

三人がワゴンを降りたのは、小一時間前。

WIBA記念館のある小野駅前、地図の上からも人目が多そうで、迷彩服に発見される怖れがある。むんたちは相談の結果、徒歩で向かうことに決めた。

全員で行く必要はない。

伊里江は体調悪く、居残り。

運動神経ゼロ（むんの目）の和久井も、居残り。

ふたりだけでは心許ないので、久保田が居残りのボス。むん、五十嵐、信太は、田舎道を走り、やがて住宅地に出ると、できるだけ人目につかぬよう裏道を行った。

そして今、五十嵐老人は信太を背負っている。背負っていても脚力は落ちない。背丈の変わらないふたりは体重も同じくらいだろう。六十歳の五十嵐が見せつけるリアルパワーにむんは改めて驚嘆した。

「屋上にWの文字ー、あれですねー」

その建物は、国道を琵琶湖とは反対方向に折れて、J R線を越えたところにあつた。

「なんだか、大手ハンバーガーチェーン店の看板をひっくり返したみたいな」

通りには誰も歩いていない。

三人はW I B A 記念館の玄関前に立った。むんがさすが自動ドアの前に進み出る。開かない。

「なあにー、想定内、想定ナイー」

信太は背中のリュックを降ろした。伊里江に借り受けたものだ。彼はそれを裏返してパソコンの体裁にすると、黒いコードを引っ張り出した。先端がカードの形をして

いる。

「えーっと、セキュリティボックスはー……と」

信太はドアの脇にある四角い箱を見つけると、カードをそこに差し込んだ。

続いてパソコンのソフトを立ち上げる。たちまち画面に文字や数字が現れ、複雑に動き始めた。

「解析中ですー」

一分ほどでポンと音が鳴った。と同時に、スルスルと自動ドアが開いてはいないか。

「すごいやん！」

むんが信太の背中を叩いた。

「伊里江さんのソフトの威力ですよー」

信太は足を踏ん張って、転倒を免れた。

受付の横を過ぎると通路はスロープになっていた。三人は誘われるように地下へと降りていった。

そこはメインの展示室だった。

天井の高い部屋の周囲にはさまざまなパネルや模型が陳列されていて、W I B Aに関するあらましを知ることができるようになっていた。

「これはナニ？」

むんが部屋中央の丸いテーブルに近寄った。

白く丸いテーブルの上には何もない。

むんは説明プレートに目を落とした。

『W I B A』

それだけ。

「模型の完成が間に合わなかったとか？」

むんが訊ねるともなく言うのと、信太がテーブルの反対側でにこっと笑った。

「？」

むんが首を傾げる。

信太は微笑んだまま、手元にあるスイッチをひねった。たちまち、むんの前に光を帯びた映像が現出した。

「わぁーっ」

立体ホログラフィ。テーブルはその投影装置だったのだ。

「これですよー。我々がいただくお宝はー」

W I B Aの立体映像である。

むんは顔を近づけた。

湖面は本物かと見まがうばかりに揺らめいている。

W I B Aは確かにひとつの都市だった

高層ビルが林立している。ドームは野球場だろうか。

真ん中を川が縦断しており、橋が架けられている。W I B A内の移動手段であるモノレールが目の前を通過していく。もちろん目玉である遊園地施設もあり、観覧車などの遊戯施設が稼働している。公園などの憩いの場所も

適度に配置されている。

むんは一目で気に入ってしまった。

（でも伊里江真佐吉がここで、萌黄たちリアル到着を虎視眈々と待ち構えている）

むんは顔を引き締めた。

五十嵐も信太も目を丸くして立体映像に見入っていた。その時、入口のドアが開く音がした。

10

むんは反射的に背後を見上げた。

降りてきたスロープの向こう、記念館の玄関付近で人の声がする。

（誰？）

むんのところからは死角になって見えない。

（ここの職員ならいいけど、違ったら――）

むんは五十嵐と信太に隠れるよう合図した。三人はそれぞれタッチパネルの陰やショーケースの後ろに身をひそめた。

足音がスロープを降りてくる。

「村井^{むらい}。お前、シュウさんについて、今朝ここへ来たんだろ？」

その時、玄関の鍵を開けたまま帰ったのかよ」

「北尾^{きたお}さん、いつもながら神経質な人ツスねえ。俺、

そんなこといちいち覚えてないツスよ」

むんは聞き耳を立てながら、注意深く顔を覗かせた。

（リアルキラーズ！）

ふたりはつい先ほど、真崎に直接命令を受けてやってきた迷彩服たちだった。

彼らの内の若いほうがフロアに降り立った途端、あれえと間の抜けた声を出した。

「どうした」

「先輩！ 立体映像が出てる」

「データを持っていた時、スイッチを切り忘れたんだろう」

「いや、それだけは俺、覚えてます。確実に切りました。誰かがまたスイッチを入れたんです」

「誰かって」北尾が腰の銃を抜くと、辺りに目を走らせた。「誰だよ」

シーンと静まり返る。

鈍い村井も、北尾の緊張した顔に事態を察知したらしく、あわてて腰に手をやった。

「誰かいるのか？」

北尾が柔らかい作り声で問いかける。

むんたちはますます物陰の奥へと身体を押し込む。

「お前、リアル探知機を出せよ」

「持って来なかったツスよ」

「役立たず！」

（よかった）

むんはひとまず安心した。うまく隠れて彼らをやり過ぎれば、逃げる方法も見つかるだろう。

（でもこの人たちは何をしにここへ——）

北尾は油断なく前に出ると、ぐるっと部屋を見渡している。

「とにかくお前は仕事をやれ」

「へ？」

「データの消去だよ！」

（消去!?）

しまったとむんは心の中で舌打ちした。

（わたしたちの手に、立体図面が渡らないようにするためやね！）

もう一度覗くと、銃を構える北尾の背後で、後輩村井は持ってきたノートパソコンを投影機に接続し、消去作業にとりかかろうとしている。

（どうしよう。地図をあきらめる？）

しかし複雑に入り組んだ街と噂の高いWIBAに、立体地図なしで挑めるのかどうか。真佐吉の策略に負けなためには、喉から手が出るほど欲しいデータであることは間違いない。

（一か八か、わたしが囷おとりになって彼らをホログラフィ装

置から引き離すか。……でも、ひとりが追ってきて、もうひとりが消去作業に徹していたら——五十嵐さんたちが相手をしてくれればいいんだけど、この状況じゃ、連絡し合うこともできない」

「データの消去、準備できました」

「——よし、やれ」

村井がリターンキーに指を掛けた。押せばデータは永遠に失われる。

「待ちなさい！」

むんは震える喉で大声を出した。

「誰だ!?」

北尾がむんの隠れているショーケースに銃を向けた。

村井は押し掛けた指を空中で静止させている。

「女だな。出てこい」

「話を聞きなさい」むんは負けじと声を張った。「あなたがたがいま触っている投影装置。そのデータを改変すれば、この地下展示室に仕掛けた爆弾の起爆装置に電流が流れる仕組みになっています」

「何だと!」

北尾の表情がみるみる真っ青になった。

「先輩い!」

村井が気弱な声を上げる。

「バカ! 嘘に決まってる」

北尾は後輩を叱ったが、伸ばした手が村井に「消去は待て」と言っていた。

「出てこい、オンナ！」

北尾が再び吠える。

むんは少しばかり落ち着いた声で、

「出ていくのはあなたがたのほうです。速やかに建物から退去することを命じます」

しかし北尾は首をひねると、

「おかしいな。いったい何のために爆弾を仕掛けた？」

妙に思うのも無理はない。むんも自分が理屈に合わないことを言ってるという自覚はある。ただ時間を稼ぎ、彼らの注意を自分にそらしたいだけなのだ。

北尾はゆっくりとショーケースに近づいてくる。もう距離は三メートルと離れていない。

むんの額を熱い汗がつたつた。

「待ちたまえ」

その時、部屋の隅に隠れていた五十嵐が立ち上がった。これには北尾も度肝を抜かれたようだ。

「――ア、アンタは確か、大学に気球で乗り込んできた大將じゃないか」

声が大きく動揺した。なにしろリアルな登場である。

対する五十嵐は、あくまで沈着冷静な物腰で、

「婦女子に銃を向けるものではない」

言いつつ両手を挙げながら、前に出てきた。

「止まれ！ それ以上こっちに来るな！」北尾の銃口が今度は五十嵐に向けられた。「くそっ、リアルに面と向かって撃つてもダメだったんだよな。畜生、いったいどうすりゃいいんだ！」

北尾は自分の処理能力を越えた事態に直面し、激しく混乱していた。

（彼らは小物や。恐れるに足らん！）

むんは一気にたたみ掛けるべく声を出した。

「リアルに勝てるわけではないわよ。戦ったらあなたがたは確実に死ぬ。さあ、武器を捨てなさい」

むんの耳に、北尾の激しい息遣いが聞こえる。

（もうあと一押し――）

しかし、むんも五十嵐も、信太の動きにはまったく気づいていなかった。

信太は壁際を忍び足で移動し、むんの反対側にまわった。するとノートパソコンを抱えて、おろおろと立っている村井の姿が、彼のちょうど目の前にあった。

信太は考える前に、書棚のあいだから飛び出していた。そしてデータの消去を阻止するべく、身体ごと村井のパソコンにダイビングした。

ドンッ、ドンッ、ドンッ。

銃声が三度鳴り、三発の銃弾が信太の身体を貫いた。

銃声が展示室の壁に反響し、続いてどすんと重いものが床に倒れる音がした。

むんは心臓を冷たい手でつかまれたような気がして、ゆらゆらと目眩めまいを感じたが、どうにか足を踏ん張って転倒をこらえた。

隠れたショーケースのあいだから覗くと、村井という迷彩服の向こうで信太の倒れている姿が見えた。村井は片手でパソコンを支えていたが、もう一方の手には銃が握られていた。信太はそれに気づかず、うかつにも銃口に向かって飛び出してしまったのだ。

別の顔が隙間から覗き込んだ。北尾である。その目と目が合い、むんは反射的に身を隠した。

凍り付いた心臓から冷たい血液が全身に流れていく。

（夢なら醒めて）

しかし北尾の冷酷な声が、むんの思念を切り裂いた。「出てこいオンナ！ それからそっちのリアルの大將、アンタは動くなよ。変な真似をすれば、お前の仲間にとどめをさしてやるぞ」

五十嵐は両手を挙げたまま、北尾たちを睨んでいる。その表情は明らかに険しさを増していた。

「オイ、出てこないと仲間が死ぬぞ！」

北尾の急かす言葉に操られるかのように、むんは手を顔の高さに持ち上げると、一步一步足音を鳴らしながらショーケースの前に出ていった。

「ほお、やっぱりあの美人の姉ちゃんだったか。となると、他の仲間もこの近くに潜んでいるのかな？」

北尾は銃を構えたまま、胸ポケットからレシーバーを取り出した。

「こちら北尾。リアル一名とその仲間二名を発見。場所はWIBA記念館。応援を乞う」

『了解！』

レシーバーを胸に納めると、北尾は油断なく五十嵐とむんに目を走らせ、

「両手を頭の後ろに組め。そのまま床に腹這いになるんだ」

と命令した。

残念だが、従うしかない。むんは片膝を付いた。

倒れている信太に目を向ける。信太は血の気の失せた白い顔で、口を金魚のようにぱくぱくと動かしていた。すでに腰の辺りがへこんでいる。砂状化しているのだ。そう長くは保たないだろう。

「村井。先にデータを消してしまえ」

「ガッテンだ！」

形勢が有利になったせいで、村井は打って変わって喜々とした表情になり、はずれたパソコンケーブルを転送装置に差し込み直した。

「急げよ！」

「判つてますってば」

村井はプログラムをリスタートした。消去すべきファイルの所在を確認しようとしているらしいが、興奮が過ぎて指が震え、何度もキーを打ち直している。

むんは腹這いになりながら、必死で考えをめぐらせていた。

ドンツ、と銃声が間近でした。むんは身体を縮めた。

「よけいなことは考えるな。じつとしてりゃいいんだ」

北尾はむんの心を見透かしたようにほくそ笑んだ。

むんの目の前の床に焦げた穴が空いていた。かすかに煙が立ち上っている。

煙越しに信太が身じろぎするのが見えた。彼の右手が何かを握っている。ひきつった顔がむんに対してはつきりと頷いてみせた。

むんの中に、何かが閃いた。^{ひらめ}

彼女は両手と爪先で床を叩くと、素早い動きでショーケースの後ろへと転がり込んだ。

「こいつ！」

北尾の銃が火を噴く。

銃弾がむんのTシャツを切り裂いた。

むんの動くのと同時に——いや一瞬早く、信太が右手につかんでいたものを、渾身の力で村井の顔に投げつけた。

「うわっ」

砂だった。信太の手の中にあっただのは、自分の腹から握り取った一つかみの砂だったのだ。

砂粒は狙いどおり、村井の目や口に飛び込んだ。

思いがけない攻撃に、村井は目を押さえて顔をしかめると、持っていたパソコンを床に取り落とした。

「五十嵐さん！」

むんが叫ぶ。

五十嵐は伏せた態勢からサーベルを引き抜くと、ダンと床を蹴った。

北尾はむんの行方を追っていたため、五十嵐の動きに対応するのが遅れた。

サーベルが天井の明かりを反射してきらめいた。

「うっ！」

あわてて五十嵐に向け直した銃を持つ手が、その手首、肘、肩口と三カ所で寸断された。

ボトボトと肉片が、床にこぼれ落ちる。

北尾はネジの切れた人形のように腰を折ると、口から泡を吹きながらも落ちた腕を拾い集めようと、今度は自

分が腹這いになった。

五十嵐はそんな北尾の横をすり抜け、刃やいばを村井に向けた。

村井は銃を持ったまま目をこすっていたが、彼が最後に見たのは、鬼のような五十嵐の形相だった。

村井の両腕が、細切れになって展示テーブルの上に落ちた。

村井はおそらく痛みすら感じる暇がなかっただろう。

気づいた時には、首は胴からはなれ、頭部も斜めに切り下げられたサーベルによって左右に泣き別れとなり、床にぐしやりと転げ落ちた。

それらは、むんがまばたきを一回するあいだの出来事だった。

五十嵐は信太に駆け寄った。信太が薄い目を向ける。

「――閣下、さすがですー」

彼の下半身はすでない。

むんも駆け寄り、信太の冷たくなった手を握った。

「は、はは。閣下といっしょに世直しするつもりでしたのにー、できなくなりましたー」

「信太よ。お前は立派な日本男児だ」

五十嵐は押し殺した声で言った。

「――ありがとうございますー。閣下のご武運を――陰ながらお祈りしておりますー」

ロウソクの火が消え入るように、信太は事切れた。

ふたりはしばらく無言でその死に顔を見つめていた。

「お嬢さん、私はこの男と約束をしたのだ」と五十嵐がしみじみとした声で語り出した。「腐った男どもの性根を叩き直し、日本男児の精神を注入し、この国を良き方向へと導く尖兵になってやろうとな」

むんは手の平を広げた。信太の手はすでに砂となって崩れていた。

「リアルが何であるかを聞いた後、信太は私に訊いた。

『閣下は元の世界に戻られるのですか？』と。私が戻るつもりはないと答えてやると、うれしそうに喜んでおつた。それなのになあ」

背後で苦しい声が上がった。北尾はまだ生きていた。五十嵐はすつと立つと、彼のそばにいき、無言でサーベルを一閃した。北尾の首が転がった。

辺りは一面、真っ赤な砂の海だった。

むんは胃の具合が悪くなるのを必死で我慢し、

「連絡を受けた敵がすぐにやってきます。データを手に入れたら、急いで逃げましょう」

そう言って携帯電話を取り出した。専用ケーブルを引き出して、投影装置のコネクタにはめるだけ。

「あつ、……接続端子が壊れてる」

迷彩服のどちらかが撃った流れ弾が当たったようだ。

「どうしよう。コピーでけへん」

むんは頭を抱えた。データを持って帰れなければ、すべての苦労が水の泡ではないか。

落ち込む彼女の目に、村井のパソコンが映った。

もしやと思い、拾い上げる。ドキュメントフォルダに『WIBA地図』というアイコンがある。

むんはダブルクリックした。すると画面に、テーブルの上に投影されたものと同じの立体映像が現れたではないか。

「よし！」

むんは握りこぶしを作った。先に入手していた迷彩服たちに配布された物だろう。

「五十嵐さん、ありました！ これで万事OKです」

「うむ」

むんはノートパソコンを閉じようとした。その時、地図データの隣りに並ぶ別のアイコンに気がついた。

ファイル名は『人員配置』。

試しにダブルクリックしてみる。

画面に琵琶湖が現れた。周囲に無数の赤い点があり、どれもが動きつつある。動いていく先は——WIBAのある近江舞子だ。さらに拡大する。赤い点はWIBAに集結しようとしている。

画面に映っているのは、迷彩服たちのリアルタイムの

配備状況なのだ。

「すごい。これがあれば敵の裏をかけるかも——！」

五十嵐は取り出した印籠のような小型ケースに、信太の身体の一部をすくいとっていた。すでに信太の頭部も砂のかたまりと化していた。

「行きましょう。五十嵐さん」

「うむ」

ふたりは玄関に駆け上がった。

しかし自動ドアを出た途端、三台のジープが急ブレーキをかけて目の前に止まり、行く手を阻まれた。

迷彩服たちがマシンガンや銃を手に、バラバラと降りてくる。

「お嬢さん、柱の陰に隠れていなさい」

言うが早いか、五十嵐はサーベルを抜いた。

その目は静かな怒りに燃えていた。

銃弾が飴のように降り注ぐ。五十嵐はそれをすべて薙^なぎ払い、叩き落とした。

彼は再び、鬼と化していた。信太の弔い合戦だった。

——わずか五分後、生きている迷彩服はひとりもいなかった。

路上には点々と落ちた指。寸断された胴。転がった首。地下展示室の再現だった。

いつしか、むんは泣いていた。

なぜ自分はこんな光景を見なくてはならないんだろう。
なぜこんな痛みを感じなくてはならないのか。

五十嵐はしかめた顔でサーベルを鞘さやに収めると、片手を立てて死者を弔なぐさめた。

「脇腹は大丈夫かね？」

戻ってきた五十嵐が訊ねた。

むんは初めて自分の身体を点検した。裂けたTシャツの下で、銃弾のかすめた箇所が血をにじませていた。

「大丈夫です。これくらい」

むんは強いて微笑もうとしたが、あふれる涙が一向に止まらない。

そんなむんをいたわるように見つめる五十嵐も、ポロシャツ、スラックスともども、さんざんに返り血を浴びて、どす黒く染まっている。

「私は今日初めて、正気で剣を振るった」

五十嵐はそう言うと、迷彩服たちの遺骸に向かって黙礼した。

「では参ろうか」

「——はい」

ふたりが記念館を後にした頃、太陽はようやく傾き始めていた。